

ダーバヴィル家の血の残影

—Tess の死の意味するもの—

太 田 藤 一 郎

I

外界からしゃだんされた、狭い、限られた環境のなかで、貧しくくらし
ている人達は、妄想にかりたてられ、婦女子を犯し、犯罪に情熱のはけく
ちを見いだした。多感な Thomas Hardy は、少年のころ、Dorchester
で犯罪者の処刑されるのを見て、恐怖にかられた。またある時は、彼の父
の投げた石が、凍え死にそうになっていた野兎に当り、殺してしまったが、
殆んど骨と皮になった野兎をつまみ上げたときの感触を、Hardy は決して
忘れなかった。不幸な出来事にたいして彼の感受性は敏感に反応した。
彼の時代は、古い農業生産様式の社会組織が崩壊して、新しい産業生産様
式の社会が誕生し、それまでイギリス人が疑いもなく受け入れていた宗教
社会、政治をささえてきた従来の信念がゆさぶられ、人びとを結びつけて
いた因襲的な絆が少しずつ崩壊していった動揺、混乱の時代であった。す
なわち、

His range does not allow him to present the vast, varied panorama of human life that we find in "War and Peace" or "L'Education Sentimentale." His scene is too narrow.¹

と、David Cecil が指摘しているように、Hardy の小説の人物たちは、
狭い社会環境の中にとじこめられ、奇妙に親しい糸でつながれ、お互に交
渉を持ちあいつつ、神の救いをうることもなく、しだいに悲劇的終焉にお

ちこんでいく。Harvey Curtis Webster が、

Not only did he lose faith in Christianity; he also began to lose faith in the integrity of Christians.²

と、言っているように、1865年頃の Hardy は、真面目であるが故に、愛情や人間関係にたいしても、権力にたいしても、神にたいしても幻滅感を抱いた。

... long after he had lost all religious faith, he continued to read the Bible as literature.³

と、William R. Rutland は宗教にたいする Hardy の態度を明らかにしている。27歳になるまでに、すでに信仰心を失った彼は、古い教義や、超自然的なものの考え方にたいして公然と反抗し、キリスト教が美德とする貞淑、哀れみ、けんそんといったものは、この宇宙では役立たないものとなっているとの見解を持った。教会の内外では *The Origin of Species* が読まれ、議論され、若者たちはこれを歓迎した。

... the evolutionary hypothesis always remained fundamental in his philosophy.⁴

と、H. C. Webster が言っているように、この *The Origin of Species* が、因襲的なキリスト教信仰を合理的に批判する緒を人々にひらいた。それは Hardy の信仰を破壊した。人生にたいする幻想を失った彼は、悲観的な人生観を持った。

... the world of respectable optimism suffers, without knowing anything about it, a considerable invasion from Hardy's world of tragic fatalism.⁵

Lascelles Abercrombie は、Hardy のいだいた悲劇的な運命観が、樂觀主義にささえられ、自由主義思想をその信条としていた中産階級の社会に、しだいにしんとうしていったことを指摘している。

人生にたいする Hardy の悲観的な見解の根底にあるものは、彼のメラノコリイな性質らしい。感情が強かったが、知的な点では、彼は19世紀の自由主義理論の支配した新しい時代の人であった。

The Church itself, and the religion for which it stood, had lost their hold upon a large section of the English public.⁶

このように、時代の中に生きる一人として、Hardy も宗教心を喪失していったことが指摘されている。教会の説く学説は、キリスト教徒の知性、良心の中にその基盤を失った。宗教、性などの問題にたいする古い伝統的な思想にたいして、Hardy は反対の立場をとる、いわゆる進歩的な思想家の一人であった。W. R. Rutland が、

... the two dominant ideas were, firstly that the Primal Cause was Immanent in the Universe, not transcendent to it; and, secondly, that the individual human being was of very small significance in the scheme of things.⁷

と、指摘しているように、Hardy の知性が把握したのは、この二つの思想、即ち Primal Cause と個人の small significance である。キリスト教の伝道者たちは、キリスト教の教えがもしも真実でないとしたら、人生は悲劇であると説いている。Hardy はこの意見に賛成した。キリスト教の学説が真実であると、彼は考えることが出来なかった。キリスト教的希望を信ずることは不可能であることを彼は悟った。ここから、彼の悲観的な人生観が生れた。彼は彼の小説をとおして、彼の考え方を描き伝えようとした。彼の作品の悲劇は運命の悲劇である、と F. R. Southernington

は述べているように⁸、作品の人物たちは、わざわいの外的原因である自然、運命、チャンスのつむじ曲りによって、また人間の意思で左右出来ない出来事によって、破滅したり、他者の罪のために苦しむのである。

そういう犠牲者の一人として、Hardy が ‘a pure woman’ として哀情の情をこめて描いている田舎娘 Tess をとりあげ、彼女が先祖からうけついで血という観点から、彼女の愛と嘆きの短い人生を分析してみたい。

II

五月の終りのある夕暮れ、郷土史の研究に興味を持っている牧師 Tringham から、へんびな山里 Marlott 村に住む病弱な行商人 John Durbeyfield は、その昔ウィリアム征服王にしたがって、ノルマンディからやってきた、この地方の有名な騎士 Sir Pagan d'Urberville の直系の子孫であって、Durbeyfield は D'Urberville の転化したものであることを教えられた。無知な John は、家計の苦しさも忘れ、たちまち殿様気取りになって、村の居酒屋にくりこむ。John に先祖のことを告げた人が牧師であることに重大な問題がある。世の人たちに心の平安を与えることを使命としている牧師のこの不用意な言葉が、John の肉体の中にねむっていた血を目覚ませ、Tess の一家に不幸をもたらす第一の誘因になった。すなわち、ここに形骸化した19世紀キリスト教が、先祖の血を無意識にうけついでいた John の肉体の中に、昔の貴族ダーバヴィル家の自尊心を無責任にもよみがえらせたことをみとめざるをえない。Hardy は遺伝の学説に関心をいだき、幾世代にもわたって続いてきた家系をたどり調べようとする。この家系追跡は、Tess においても重要な要素となっている。H. C. Webster が、この点について、

... in *Tess* heredity is an important and credible factor in the heroine's development.⁹

と、Tess における遺伝の問題を指摘しているように、Tess は豊満な美しさを母からうけついでいるが、父をとおして先祖の a slight incautiousness of character をうけついでいる。彼女が直面する苦境にたいして、誰からも援助の手がさしのべられなかったが、彼女は彼女の運命に勇敢に抵抗している。彼女は自分の貞操を犯した Alec の金銭的な援助を拒否し、Alec の身勝手な考えを許そうとしない。これは彼女の血の中にひそむ自尊心の指令なのである。

近郷の農家の婦女子の貞操をじゅうりんし、血を奪った、その先祖の悪業の血をうけついで彼女が、先祖の犯した罪障をあがなうことを、Hardy は描いている。そこにわれわれは、作者の応報と遺伝にたいする観念をみる。その結果、作品 Tess には、あまりにも血、あるいは血を象徴する赤い色が、いたるところににじんでいることを発見する。Tess の住む盆地は、むかし、追いつめられて、殺されるところを、王によって赦された美しい白い牡鹿が、Thomas de la Lynd という男に殺されてしまったという伝説を秘めた、‘Forest of White Hart’ とよばれる場所である。白い牡鹿が赤い血を流して落命した物語に、われわれは Tess の運命的な血の末路を予感させられる。また、白衣で踊る村の女達のなかで、芍薬の花のように匂いたつ、表情ゆたかな、唇をした Tess は、髪に赤いリボンをつけていて、彼女と Angel との運命的つながりの条件が設定される。酒に酔った父にかわって、蜜蜂の巣箱を町の市場にはこんでいくとき、Tess の御していた荷馬車は暁の郵便馬車と衝突し、彼女は顔、衣服に、即死した馬 Prince の返り血をあびる。一家の働き手であった馬の死は、彼女の一家をますます貧窮におとし入れる。彼女は責任を感じ、気のすすまないままに、運命の神にしばられたかのように、親戚の名乗りをして仕事を求めるために金持の Stoke d’Urberville 家に出向いていく。この邸の実態は、都会の成金商人がダーバヴィル家を僭称して、田舎に移り住んだ偽造旧家なのである。彼女を迎えた Alec (Alexander の縮小形——征服王

Alexander the Great に通じる) は早くも、

‘Well, I’m damned! What a funny thing! Ha-ha-ha! And what a crumby girl!’¹⁰

と、肉感的な、美しい Tess の征服に心をおどらせる。こうして、19世紀の経済文明が生みだした Alec の不純な悪の世界と、田舎そだちの無力な Tess の純粋な世界との戦いが開始される。

Tess Durbeyfield did not divine, as she innocently looked down at the roses in her bosom, that there behind the blue narcotic haze was potentially the ‘tragic mischief’ of her drama—one who stood fair to be the blood-red ray in the spectrum of her young life.¹¹

運命の神は、赤い血をささげなければならない Tess の悲劇的結末を暗示している。彼女の悲劇は Alec との関係からはじまる。彼女の胸に、帽子に、籠にもあふれるほどのバラの花を、彼女は Alec からあたえられ、身体中バラの花でうずめられる。それは恐らく赤いバラであろうし、彼女の生命の血がやわらかににおう青春の姿でもあった。彼女は胸にさしたバラのとげで顔をさされるが、これは Alec によって貞操をうばわれる彼女の将来を暗示するものである。

仕事を与えられ、Alec の邸で生活する Tess が、Chaseborough の縁日の夜、放蕩な Alec によって犯される。その場所は、‘The Chase—the oldest wood in England’¹² と書かれており、ダーバヴィル家の末えいの Tess が犯される場所が The Chase (猟場) とは、まことに皮肉である。指にダイヤモンドをきらめかす Alec によって象徴される都会の経済力、物質文明の悪が、田舎の素朴な自然に浸入し、可憐な野の花を散らしたのである。そこに経済力の横暴さをみる。その時、猟場は月落ちて

眞の闇、 Tess を守護する天使は現れなかった。彼女が素朴に信じていた神はその時どこに行っていたというのか。

One may, indeed, admit the possibility of a retribution lurking in the present catastrophe. Doubtless some of Tess d'Urberville's mailed ancestors rollicking home from a fray had dealt the same measure even more ruthlessly towards peasant girls of their time. But though to visit the sins of the fathers upon the children may be a morality good enough for divinities, it is scorned by average human nature;¹³

ここにわれわれは、神の不在を考える作者の宗教批判と、 Tess の先祖の犯した罪障にたいして、彼女があがなった因果応報の観念をみる。貞操をうばわれた Tess は、実家にかえるみちすがら、大きな文字で、“THY, DAMNATION, SLUMBERETH, NOT.”¹⁴ とか、“THOU, SHALT, NOT, COMMIT-”¹⁵ と壁や踏板に書いている一人の男に出会う。一語、一語のあとにコンマが打たれているのは、その言葉の意味を読む者の心に痛烈に浸透さす目的を持っているのであろう。

But the words entered Tess with accusatory horror.¹⁶

赤ペンキでぬりたくられたこれらの文字は、 Tess の受けた経験を罪あるものとし、彼女を恐怖におとし入れる。けばけばしい朱色の文字に、 Tess はおしつぶされ、殺されそうな気がした。彼女は、“Pooh—I don't believe God said such things!”¹⁷ とつぶやく。彼女は教会の礼拝にも心やすまらない。教会は彼女を拒否する世界とかわり、宗教、経済の支配する世間が、彼女にはおそろしかった。彼女の生んだ私生児は、社会の掟を犯した罪の児とみなされた。いまの彼女にとっては、森の暗闇は恐ろしいものではなく、むしろ彼女に心の自由を与えた。

Tess herself becomes unable to understand why she is condemned. She cannot understand in what sense her child, Sorrow, has offended against society. Yet, this bastard gift of senseless Nature, must suffer through no fault of its own.¹⁸

Tess の児が罪もないのに何故社会から非難されなければならないのか、彼女にはわからない。その児はまだ洗礼をうけていない。未洗礼のまま死ねることは、地獄におちいることを意味していた。牧師を迎えることの許されない Tess は、危篤の赤児を自らの手で洗礼し、Sorrow と名づけた。彼女のこの行為をもしも神が認めないなら、愛と許しを説くキリスト教の天国論を彼女は認めることができなくなるだろう。彼女の幼な児、Sorrow の死。彼女の要請にもかかわらず、キリスト教徒としての埋葬を牧師から拒否され、自殺者や悪党など、罪人を葬むる、いらくさの生いしげる墓地に埋められた。

‘Then I don’t like you!’ she burst out, ‘and I’ll never come to your church no more!’¹⁹

このように、無力な悲しい状況にある彼女に、教会は理解と力とを与えなかった。彼女は牧師に公然と反キリスト教的態度を表明した。これはまた、閉ざされた、一つの狭いキリスト教社会からの、彼女の離脱を意味する。失なった貞操についても、はたして純潔がなくなったのか、どうかということについて、疑いを持った。その結果、神に救いを求められない彼女は、彼女の生活を支配しようとする運命との戦いにのりだすのである。

A struggle between man on the one hand and, on the other, an omnipotent and indifferent Fate—that is Hardy’s interpretation of the human situation. Inevitably it imposes a pattern on his picture of the human scene.²⁰

彼女は先祖にたいする崇拜のこころを持つことができず、むしろ、彼女を不幸にした先祖の不浄な血を憎んだ。貧しい家族を救うために、乳しぼりの女となって、Talbothays の酪農場で働くことになる。

... women whose chief companions are the forms and forces of out-door Nature retain in their souls far more of the Pagan fantasy of their remote forefathers than of the systematized religion taught their race at later date.²¹

他の女たちと同じように、自然の中で、自然を友として働く Tess の魂の中には、異教徒的要素がひそんでいた。その要素が、キリスト教社会から見離された彼女に、再起の力を与えた。牧師を父とし、僧職にある二人の兄たちと異なる意見を持ち、僧職につくことを拒否し、将来の農場経営にそなえて、実習のためにこの酪農場にきていた青年 Angel Clare に彼女は会う。聖職につくための踏み台としての大学教育を、神の名誉と栄光のために用いられる大学教育を、彼は軽蔑した。父と子の考えは対立し、息子は冷静な論理の世界を守ろうとする。彼は古いものをすて、新しいものを求め、人間性の理解者をもって任じている。その彼の名前が、たとえ父親からつけられたものであるにせよ、Angel とは皮肉なことである。彼は形式、習慣を無視し、旧家、社会的地位、富といった物質的栄誉や、現代の都会生活の不条理を嫌悪し、資産よりも知的自由に価値を見出している。Tess と Angel との愛情が深くなっていくにつれて、騎士の血統をひいている自分の古い血に彼女は苦しむ。とりわけ、彼女が貞操を失ったことは、愛を達成していく上で、致命的な条件失格であると彼女はかなしむ。ひとときの恋のたのしさに酔いしれたのちに味わう、彼女のたえがたい、長い良心のくるしみ、われわれは、運命の悲劇が彼女をとらえ、徐々に生けにえにしていくのに気付く。

Angel から求められ、Tess の肉体の中を流れる血は鳴りひびき、彼女

のしりごみに反抗し、彼をうけ入れ、快楽の果実を摘みとり、歓喜の湖にひたれとすすめる。この誘惑に、彼女の良心の願いもそうながくは対抗できない。それ程、彼女はいつのまにかはげしく彼を愛し、彼女の目には、彼こそ彼女を愛し、抱きとめてくれる地上の神 (god) に見えた。彼女は過去の秘密を手紙にしたため、彼の部屋の戸の下にさし入れたが、不幸にもそれは敷物の下にはいつてしまった。運命の神の手は、幸福になりたいと願う Tess を解放しない。Angel の態度の変らないのを見て、過去の出来事を理解されたものと思った彼女は、ついに彼との結婚に応じた。それは彼女の第二の悲劇の開幕である。二人が初夜をすこす家は、かつては立派な荘園の館の一部であり、ダーバヴィル家の屋敷の一つである。奇しき因縁と言おうか、この屋敷の中で、無慈悲で、陰険な表情をした女と、傲岸不遜の顔付をした中年女性、すなわち、Tess の先祖の夫人達の絵姿に彼女は対面する。彼女が Angel に過去の過失を物語ろうとするとき、

The ashes under the grate were lit by the fire vertically, like a torrid waste. Imagination might have beheld a Last Day luridness in this red-coaled glow, which fell on his face and hand, and on hers, peering into the loose hair about her brow, and firing the delicate skin underneath. A large shadow of her shape rose upon the wall and ceiling.²²

真赤にもえあがる石炭の光は、彼女の姿を壁にも天井にも大きく反映し、最後の審判の日の業火もかくやあらんと思わせた。炉格子の中の焰は、小鬼のように、悪魔のように、奇妙に見えた。結婚式このかた積みかさなった不吉のきざしが、二人を縛り、先祖の不浄の血のかげが Tess を破壊していく。彼女の告白を聞きこんらんした Angel の分別、論理は、意外にも彼女を許さなかった。赦しを哀願する彼女に、

‘I repeat, the woman I have been loving is not you.’

‘But who?’

‘Another woman in your shape.’²³

と、Angel は冷たくつきはなしてしまう。これは、これまでの彼女への愛が、彼の理性の働かないときに開花したものであることを示している。新しい論理の世界に生きようとする彼のなかに、いまなお彼の父、兄たちの古い因襲的な宗教の陰影と、昔の価値判断の亡霊がひそんでいる。封建主義的な因襲性を軽蔑していた Angel は、Tess の肉体の中に流れる旧家の血に敗北し、それは、彼自身の悲劇をひきおこすとともに、彼を支えてきた論理そのものの狂いは、Tess の悲劇に手をかすことにもなる。神の愛ではなしに、Angel の人間的な愛情のなかに、薄幸の身をなげこもうとした Tess、その彼女を悲劇におとし入れた仕掛人は、Alec につづいて、この Angel である。彼女の僅かな人権をじゅうりんする、19世紀イギリスの男性の横暴さ、身勝手さをここにみる。彼女をイギリスに残して、ブラジルに出発した Angel、人生を頭でしか知らない彼にすてられて、なお彼を愛しつづける Tess の愛情の深さに、女の哀しさがまつわる。

宗教界の因襲性をきらい、進歩的、良心的に生きようとする、理想にもえた若者 Angel も、妻となる女性の最もふさわしい条件は、純潔、貞淑であると彼の母から言われ、牧師館の両親の前では、彼はたちまち因襲と慣習の奴隷となり、形骸化した西欧キリスト教文明をうけいれる。そのために生命をすてようとさえしている Tess の真実の姿を、彼は見失ってしまう。Tess の女友達を誘惑して、ブラジルに連れていこうとするほど、彼の論理はこんらんし、彼はつまらない男になりさがる。仕事を求めて、苛酷な労働を要求する高地の農場に出かけていく Tess は、彼女の体をもとめようとする暴漢から逃れ、柵の林の中で横たわりながら、非情な運命を痛哭する。すべてが、彼女にとって空である、いな、空よりもっと悪い。

All was, alas, worse than vanity—injustice, punishment, exaction, death.²⁴

不公平、処罰、強要、死が、男たちから Tess に押しつけられている。都会の経済的権力の象徴 Alec も、教会の倫理をけいべつして、人間的な愛に生きようとしたけれども、いとも簡単にその立場を放棄した Angel も、この暴漢と同じように、つまらない男たちにすぎない。下劣な男たちを恐れ、身体を守るために、彼女は自分の顔を汚くしなければならない。終の落葉の中に眠ることは、恐ろしいことではなかった。むしろ、自然は彼女を安堵させた。けれども、猟師に撃たれて林の中に逃げてきた雉が、血を流し、衰弱し、羽根を血にそめて、死んでいくのを、暁のひかりのなかに、彼女は目撃した。その雉の死、それは、身勝手な男性の狩人たちによって傷つけられ、社会の無法な掟によって追われる清純、素朴な Tess、まだ致命的な血を流していないが、やがて出血多量のために倒れなければならない、彼女の死の近いことを暗示するものである。

横なぐりの雨に全身ずぶぬれになって、高地の農場で早朝から太陽の沈むまで、まるで奴隷のように働く Tess、彼女は援助を求めるために、Angel の両親に会いに行く。牧師館のベルを押したが、誰も現われない。さらに運命は無情にも、彼女を非難する Angel の二人の兄たちの会話をもれきかせ、彼女をして Angel の両親に会うことを断念させる。これは彼女が教会によって拒否されたことを示すものである。さらに運命の神は、農場への帰途、彼女と、説教者に変身して村の人たちに辻説法をしていた Alec とを再会させてしまう。実際には信仰心のない彼を、彼女は不快に感じ、拒否する。Alec は彼女を求めようとする妄念にとらわれ、神をうらぎる。彼の改宗はもともと理性とは関係がなく、母を失った悲しみにもとづいた一時的な感情によるものであった。かつて Alec の欲望をそそった Tess の美しい肉体が、彼女を不幸にしたのであったが、いま彼女のそ

の美しさが、逆に彼をして神の世界から脱落させた。ここに、われわれは皮肉な生生流転の相をみる。強力な財力と権力とによって、Tessの先祖が貧しい人たちに服従を強要したとおなじように、説教者 Alec から、宗教心がない、異端者だときめつけられた Tess が、後になって彼女の肉体を軽蔑する彼に自由にさせざるをえなかったのは、彼女の一家の極貧であった。彼女を征服出来たのは、彼の経済力であった。南米大陸の奥地で病気になる Angel は、Tess にたいする彼の処遇のあやまりに気付いた。彼は彼女を批判する立場から、擁護者に変身した。また、軽蔑していた彼女の血統によっても、彼の感情はうごかされ、彼女への愛情がよみがえった。帰郷した Angel の姿を見て、彼女は歯をくいしばり、唇から血を流し、くやし涙にくれた。二度も自分の幸福を破壊した Alec を彼女は肉切りナイフで殺害した。白い天井からにじみしたり落ちる血、それは今まで受身で悲劇にさらされてきた Tess の勝利と、先祖の血がよみがえったことを示すものである。

... he looked at her as she lay upon his shoulder, weeping with happiness, and wondered what obscure strain in the d'Urberville blood had led to this aberration—if it were an aberration.²⁵

これは、正真正銘のダーバヴィル家の血が、ストック・ダーバヴィル家の偽の血にうちかった、印象的な瞬間である。たとえ、束の間の幸福であっても、Tess が愛する Angel に全身をゆだねる意味深いせつななのである。Angel ははじめて名実ともに彼女を守護する天使たらんと決心する。空き別荘での逃亡生活、二人の部屋は愛情と許しと和合とにみちていたが、冷酷、無情な外界の掟は、彼女を殺人者として、追跡してくる。逃れて異教徒の寺院跡 (Stonehenge) にたどりついた Tess は、闇につつまれて Angel のそばで安らかにねむり、朝の光がさしそめ、闇が消えさったとき、心しずかに捕えられる。ひかれて行く二人の上に、太陽の光は無慈悲

に微笑んでいた。彼女が精神的安らぎを得た世界は、異教徒の世界であり、夜の闇の世界であった。朝の光の明るさは、文明社会の掟を象徴するものである。

III

Winchester で Tess の処刑が終り、

‘Justice’ was done, and the President of the Immortals, in AEschylean phrase, had ended his sport with Tess.²⁶

と、Hardy は、社会の身勝手な掟の前に、無力で純真な Tess が落命したことを描写することによって、彼女をいけにえにした社会の正義なるものと、神の無慈悲さを皮肉り、いきどおる。彼女を不幸にしたものは、社会であり、社会の文化をつくり上げていた聖書であり、また因襲的なしきたりである。Tess にとっては、短い悲しい人生であり、それは平和と幸福とを求めた必死の苦しい戦いであつたけれども、神は彼女をおもちゃにし、彼女にたわむれたにすぎなかった。彼女の加害者は地上的存在を代表する Alec と、天上的存在を代表する Angel である。この点について、

Angel Clare is indeed utterly ethereal; his love is “more spiritual than animal.”... Alec d’Urberville is almost a stage villain with his “swarthy complexion... full lips... well-groomed black moustache with curled points,”...²⁷

と、Ian Watt は指摘している。Angel は空理空論をふりまわす理想主義者 ‘a doctrinaire idealist’²⁸ にすぎない。Tess の告白を聞くや、たちまち彼女をすててしまう。そういう意味で、頭だけで恋をしている観念的なこの Angel のような性質の人物が、果してこの世の中に存在しうる

か、否か、ということをわれわれは考えさせられる。Alec と Angel は、Tess の悲劇の具体的な加害者であるけれども、彼女の悲劇の引金になったものは、彼女がうけついで先祖の血のうちの、不純の血なのである。Jeannette King が、Alec を殺した Tess の行為を ‘the hereditary quality’²⁹ のせいと言っているように、それまでの彼女は大きな抵抗できない運命にあやつられ、先祖の血に動かされてきた。受身の姿勢で生きてきた Tess は、運命の神の意思の望む方向を修正することが出来なかった。しかし、Alec を刺殺して、はじめて、彼女は主体性を持ち、人間としてよみがえった。

... it is that his Tess is a living woman.³⁰

と、指摘されているように、逮捕されることによって、運命の神の手を離脱した Tess は、自分の死後の処置について、Angel に妹をたくすだけの主体性をもつ女性に変化している。しかし、その変化は彼女の生命を犠牲にして初めて獲得されたものである。

このように、Hardy の作品においては、人間のめざす意思と、運命の神の意思とはかみあわない。そして、Hardy の作品の背後にある宇宙は、非人格的な、巨大な、一つの機構となった。Egdon Heath を脱出して、都会生活を望んだ Eustacia の意思をくだいたのも、嵐を友とし、文明を敵とする Egdon Heath が象徴するこの宇宙機構なのである。

Nature's complete indifference allows the good and the bad to perish alike. Individual worth means nothing in a scheme which cares only for the perpetuation of the race.³¹

と、H. C. Webster が言っているように、残酷な運命の神が、愛し合う人たちの上にはたらきかけ、破壊する。その愛が激しく深いものであればあるほど、抵抗がおこり、破壊情況から深刻な悲劇が生れる。Lascelles

Abercrombie は、

... there is no tragedy where is no resistance.³²

と述べて、Hardy の悲劇作品における抵抗の重要性を認めている。もしも Tess が Angel の両親から援助を受け、キリスト教の世界と妥協していたなら、彼女の悲劇は起らなかったであろう。彼女は貧乏と孤立に直面しながらも、社会（経済、宗教）に抵抗する。そして、身勝手な社会の法則にたいする彼女の頑固な抵抗をささえたものは、彼女の肉体の中にひそんでいた先祖の血の目覚めであろう。彼女の先祖がぎせいにした田舎の私たちの血を、運命の神は Tess につぐなわせようとする。Alec を殺し、彼女を悲劇の終えんにおいこんでいくのは、実は先祖の血の中にひそむ自尊心と頑固さ、そのものにほかならない。

Tess の存在は、白の色で象徴化されている。彼女の美しい白い肉体、五月踊りで身体にまとった白い舞衣、Alec に犯された夜の白いモスリンの衣服、森の中で討たれた白い牡鹿、血のにじむ白い天井—これらの描写は赤い血の効果をたかめるために、白い色が用いられたことは明らかである。そのなかでも、Alec が Tess によって刺殺され、二階の部屋の床をとおって、一階の白い天井ににじみ出した赤い血の描写は、最も効果的である。Angel の知性、論理は、運命の神の手から Tess を救い出すことが出来ない。むしろ、彼女をおとし入れ、海外に逃亡することによって、運命の神に手をかした。その結果、運命の神の超人間的な力に抵抗しきれず、彼女は自分の血を代償に、Alec の血を要求し、復讐したのである。先祖からの遺伝をみとめた彼女は、自分がうけついで悪い性格は除いて、良い部分だけを持った妹を、自分の身代りとして Angel に託す。この Tess の最後の言動は、先祖の残影を自分限りで断ち切ろうとする彼女の悲願を示すものである。Tess の妹と Angel は手を取りあって、姉の処刑の終わったことを告げる黒い旗が塔上にかかげられるのを見まもっている。彼女

の処刑は、彼女の生命をささえてきた先祖の血が、ついにその生命を失い、鮮血は次第に黒く変色していくことを意味する。血は大地に流れ、吸収される。白一赤一黒、この一連の色のつながりのなかに、彼女を裁いた社会正義の正体が、実は初期の純粋な精神を失って、変貌した文明社会の生み出した悪の汚辱そのものであることを、Hardy は読者に訴えようとしている。作品の副題として、*A pure woman faithfully presented* と作者は書いているが、われわれは、Tess の純粋さをけがしたものが、何であったかを反省しなければならない。それはキリスト教文化のつくり出した社会がもつ汚濁であるとともに、更に有力な要因として、ダーバヴィル家の傲岸不遜のけがれた血であることを知るであろう。心清く、美しい Tess、先祖の罪をせおい、運命の神にもてあそばれ、年若くして散る彼女の悲劇が、もともと、神の御心を伝えることを務めとしているはずの、牧師トリンガムの不用意な発言によることを想うとき、われわれは、自然の中に存在する人間の力と、非人間的な力とのさけられない闘争をみとめざるをえない。

注

- 1 David Cecil, *Hardy the Novelist* (London: Constable & Co. Ltd., 1950), p. 34.
- 2 Harvey Curtis Webster, *On a Darkling Plain* (Chicago: The University Press, 1947), p. 58.
- 3 William R. Rutland, *Thomas Hardy: A Study of his Writings and their Background* (Oxford: Basil Blackwell, 1936), p. 1.
- 4 Harvey Curtis Webster, *op. cit.*, p. 44.
- 5 Lascelles Abercrombie, *Thomas Hardy: A Critical Study* (New York: Russell & Russell, 1964), p. 84.
- 6 William R. Rutland, *op. cit.*, p. 77.
- 7 *Ibid.* p. 56.
- 8 Cf. F. R. Southerington, *Hardy's Vision of Man* (London: Chatto & Windus, 1971), p. 33.

- 9 Harvey Curtis Webster, *op. cit.*, p. 175.
- 10 Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* (London: Macmillan and Co. Ltd., 1971), p. 54.
- 11 *Ibid.*, p. 52.
- 12 *Ibid.*, p. 87.
- 13 *Ibid.*, p. 91.
- 14 *Ibid.*, p. 97.
- 15 *Ibid.*, p. 98.
- 16 *Ibid.*, p. 97.
- 17 *Ibid.*, p. 99.
- 18 Harvey Curtis Webster, *op. cit.*, pp. 178-9.
- 19 Thomas Hardy, *op. cit.*, p. 117.
- 20 David Cecil, *op. cit.*, p. 26.
- 21 Thomas Hardy, *op. cit.*, p. 124.
- 22 *Ibid.*, p. 257.
- 23 *Ibid.*, p. 260.
- 24 *Ibid.*, pp. 313-4.
- 25 *Ibid.*, p. 432.
- 26 *Ibid.*, p. 446.
- 27 Ian Watt, *The Victorian Novel* (London: Oxford University Press, 1971), p. 409.
- 28 David Cecil, *op. cit.*, p. 118.
- 29 Jeannette King, *Tragedy in the Victorian Novel* (London: Cambridge University Press, 1978), p. 22.
- 30 W. R. Rutland, *op. cit.*, p. 237.
- 31 H. C. Webster, *op. cit.*, p. 68.
- 32 Lascelles Abercrombie, *op. cit.*, p. 29.